

## 第4章 ふるさとを知ること

---

白河市の都市づくりの出発点「ふるさとを知ること」に基づき、人の営みや土地の使い方の歴史と、ふるさと感じられる風景を整理します。

## 第4章 ふるさとを知ること

### 1. 白河市街地の移り変わりと人々の生活

我が国では戦国時代末期に戦国大名によって、武士・商人・職人を城下町に集住させ、城の防衛機能と共に行政都市・商業都市としての機能を持つ近世都市（城下町）が建設されました。現在の主要地方都市のルーツは、ほぼこの時に始まっています。白河市の市街地も、少なくとも今から400年前に戦国大名白河結城氏によって城下町が建設され、都市としての歴史が始まっています。

本市の市街地の移り変わりの歴史を知ることが、今後の都市づくりを考える上で大変重要です。「人の営み」や「土地の使い方（土地利用）」などの歴史は、現在の白河という都市が抱える課題に対し様々な示唆を与えてくれています。山や川などの自然地形と融和した都市空間、密なコミュニティとにぎわいのあるコンパクトな都市空間、那須連峰など周辺の山々を借景に取り入れた都市空間、微妙な地形の高低差を読んで水路を網の目状にはりめぐらした都市空間、周辺農村と連携・共生した都市空間、数え上げればキリがないのかも知れません。そして、400年後の今も城下町の都市空間は連続性を保ちつつ、白河という都市のアイデンティティを現在の私たちに引き継いでいます。

#### (1) 近世都市白河の誕生(400年前)

##### 【市街地の様子】

白河という都市は、那須連峰を源とする阿武隈川とその支流である谷津田川に挟まれた東西に細長い地形上に築かれています。

1601年頃、すでに小峰城とその城下町が奥州街道沿いに形成されていました。白河という都市の誕生です。阿武隈川の流は現在の会津町の南側を流れ、小峰城は阿武隈川を背に本丸・二の丸・三の丸が配置されていました。奥州街道沿いの町屋は城をカギ型（稲妻型）に取り囲むように築かれています。城下町には、生産手段を持たない武士が、食糧などの生活物資を供給する商人や職人を城下町に住ませたのです。

このように、白河という都市は少なくとも今から400年前に原型が整えられたのです。



(2)江戸時代の白河市街地(380～140年前)

【市街地の様子】

1627年に白河藩が成立し、初代藩主となった丹羽長重は、小峰城の大改修とともに城下町(町屋)の再整備、阿武隈川の付け替え、奥州街道のルート変更(南側)など、現在の中心市街地の基礎を築きました。以後、明治維新(1868年)までの240年間、小峰城と城下町はほぼ変わることなく、西白河郡や石川郡、岩瀬郡など白河藩の政治経済の中心都市としての役割を担いました。天神町、中町、本町、横町、田町の通り五町を中心とした町屋は、武家地や周辺農村の人々の暮らしを支える商工業の集積地として繁栄しました。

江戸時代中頃の城下町人口は、町人口が7,500人、武家人口とあわせると約1万5,000人と推定されています。

【市民の生活の様子】

江戸時代には、全国に約200～270程度の藩がありました。小峰城は白河藩主の居城で、武士は侍屋敷に住み、商人や職人は町屋に、農民は周辺農村に住んで農業生産を営んでいました。通り五町の町屋には白河藩内で生産された物資が集まり、定期的に市が開かれたりして武家や町人、周辺農村の人たちでにぎわっていました。だるま市や提灯まつりの起源も江戸時代で、祭りは地域のコミュニティを高める場ともなっていました。

この頃教育も普及し始め、約200年前には白河藩主松平定信によって武士の教育機関として立教館(阿部家の時代には修道館、会津町に所在)、庶民の教育機関として敷教舎(中町)がそれぞれ設置されました。また、周辺農村にも寺院を利用した寺子屋が多数設けられました。



## (3) 明治時代の白河市街地(120年前)

### 【市街地の様子】

明治元年(1868年)、戊辰戦争により小峰城は焼失し、武家屋敷地も田畑へと変化し町屋だけが残りました。明治20年には、東北本線が開通し、旧小峰城を南北に分断する形で、旧三の丸に白河駅が設置されました。これにより奥州街道沿いを中心とする都市構造から、東北本線白河駅を中心とする都市構造に変化していきました。駅舎が中町と本町に隣接して設置されたため、江戸時代の城下町がそのまま近代の中心市街地へと機能が引き継がれました。陸羽街道(国道4号)は、旧奥州街道から西側の旧原方街道に変更されます。明治22年には、白河町として町制が施行されました。旧小峰城内には町役場(中町)や裁判所(郭内)、郡役所(道場小路)等の公共施設が設置されていきます。また、白河小学校(八幡小路)も明治19年に創立されています。

### 【市民の生活の様子】

鉄道開業により徒歩や馬などの陸路輸送から、鉄道輸送へと変化していき、明治42年には白河電灯株式会社が設立され、各家庭には電気が灯るようになります。翌43年には電話も開業され、人々の営みも徐々に近代化していくことになります。



明治時代の本町通り(1880年頃)



明治時代の食事のしたく



(4)大正・昭和初期の白河市街地(70年前)

【市街地の様子】

大正5年(1916年)、白河町と棚倉町を結ぶ白棚鉄道が開通します。同10年には東北本線の軌道も高架式となって付け替えが実施され、白河駅舎も現在の地に移ります。これにともない、小峰城の旧二の丸・三の丸の堀や、石垣が埋め立てされていきます。また、市街地から南湖に通じる道路も整備されます。この頃、市街地の東端に白河高等女学校(現白河旭高校)、西端に白河中学校(現白河高校)が設置されます。市街地も郭内や昭和町・旭町などに少しずつ広がっていきます。

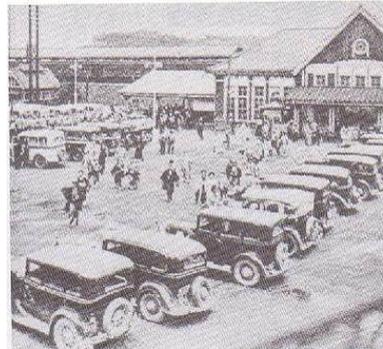
また、昭和初期には戦時体制の波が白河にも押し寄せ、友月山に防空壕が設けられたりしています。

【市民の生活の様子】

白河駅前には乗り合いタクシーやボンネットバスなどが古写真に写っています。鉄道輸送とともに公共交通のバスやタクシーも徐々に普及し始めます。また、この頃は、白河第一、二、三小学校の3校が市街地に設置されました。



1950年(昭和25年)頃の本町通り



白河駅前のタクシーとバス(昭和の初め)



## (5) 昭和40年前後の白河市街地(40年前)

### 【市街地の様子】

昭和36年頃、中心市街地を通過していた国道4号のバイパス道路が市街地の北側に開通しました。また、戦時中に白棚鉄道が廃止され、日本初のバス専用道路となり、モーターゼーションの波が白河にも押し寄せてきます。これにともない、白河駅を中心とするバスによる公共交通網が周辺地域へと細かく結ばれていきます。また、人口増加にともない、郊外の会津町、金勝寺、八竜神、関川窪、石切場、昭和町などに市営住宅の整備が行われていきます。

昭和40年の旧城下町エリアの人口は、約15,300人です。

### 【市民の生活の様子】

昭和38年、自家用車や農業機械の普及などにより、日本三大馬市のひとつに数えられた白河馬市が廃止されます。翌年には東京オリンピックが開催され、「三種の神器」(テレビ・洗濯機・冷蔵庫)と呼ばれた電化製品が普及、上水道も整備されるなど、生活様式の変化が進みます。中心市街地にはイトーヨーカ堂、十字屋などの大型店舗などが開店していきます。



本町通りの七夕(昭和31年)



昭和40年頃の食事のしたく



(6) 昭和50年前後の白河市街地(30年前)

【市街地の様子】

昭和48年に東北自動車道が開通し、西郷村に白河ICが設置され、同57年には東北新幹線開業にともない新白河駅も設けられ、高速交通時代に入ります。これにともない、市街地も西側に大きく拡大していきます。郊外の市営住宅も高層化していき、その周辺には宅地需要の高まりを背景に宅地化が進みます。

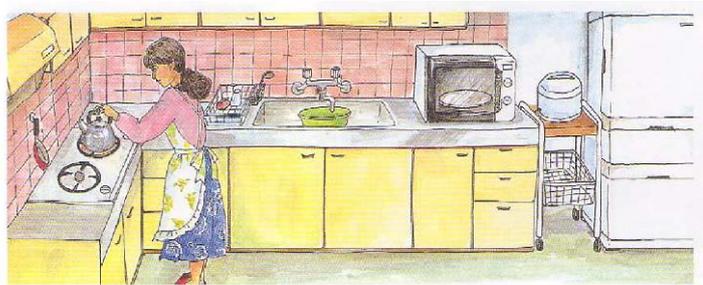
昭和50年の旧城下町エリアの人口は、約13,100人です。

【市民の生活の様子】

高度経済成長の過程で人口が市街地に集中する傾向が強まり、都市的生活様式が拡大していきます。これらのことを契機として郊外に良質な住宅を求めるライフスタイルが徐々に広まっていき、核家族化が進んでいきます。



松風の里（高層化する公営住宅）



昭和50年頃の食事のしたく



## (7)現在の白河市街地

### 【市街地の様子】

平成10年に市街地を取り巻く環状線が完成し、新白河駅前や南湖上流地区の市街地化が目立ってきます。また、ニュータウンの開発や工業団地に企業立地が進みます。一方、400年の歴史を持つ中心市街地では、人口が減少し、空き店舗などが多くなっています。さらに本格的な人口減少時代に突入した現在では、郊外部も含んだ都市全体がスポンジのように空洞化していく傾向が見られます。現在の市街地の都市構造は、環状線（リングロード）を中心に、白河駅前地区、新白河地区、南湖公園地区の3つの部分を核として成立しており、本市の大きな特徴のひとつになっています。

また、災害とはまるで無縁であった本市に、平成10年8月27日未明に未曾有の大水害が起きました。堀川や谷津田川が増水し深刻な被害がもたらされました。この後、河川激甚災害対策特別緊急事業が採択され、河川改修事業が行われました。谷津田川は市民に愛される憩いの水辺空間となっています。平成17年の旧城下町エリアの人口は、約8,500人です。



新白河駅周辺



水害後に整備された谷津田川



(8) 白河市中心部の市街地の移り変わり

400年前



江戸時代



明治時代



大正・昭和初期



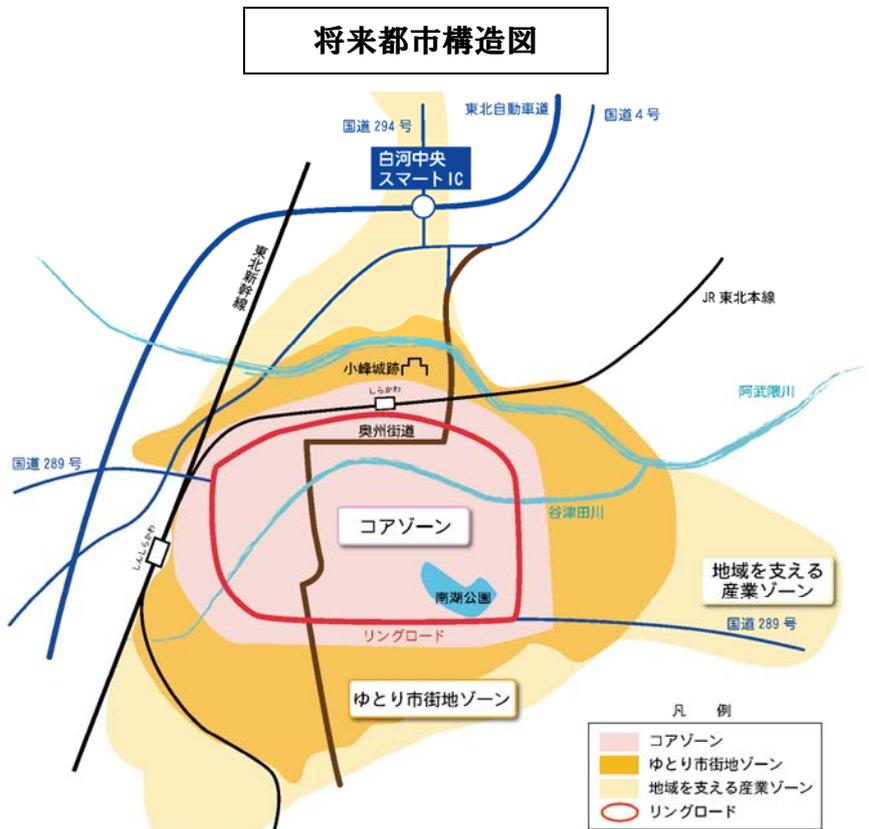
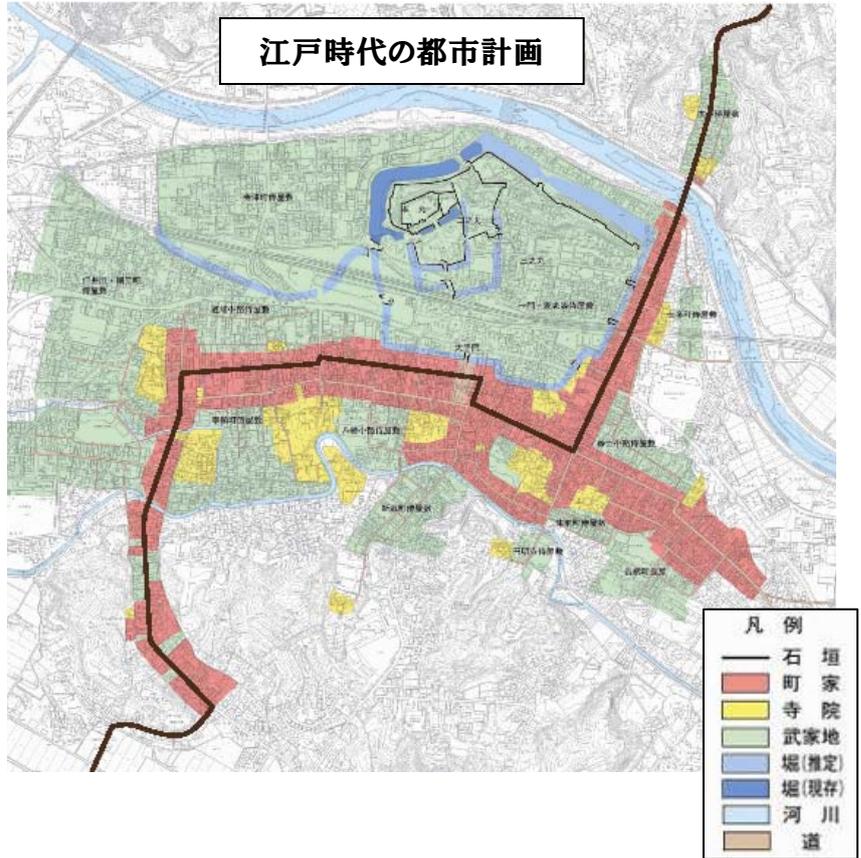
昭和40年前後



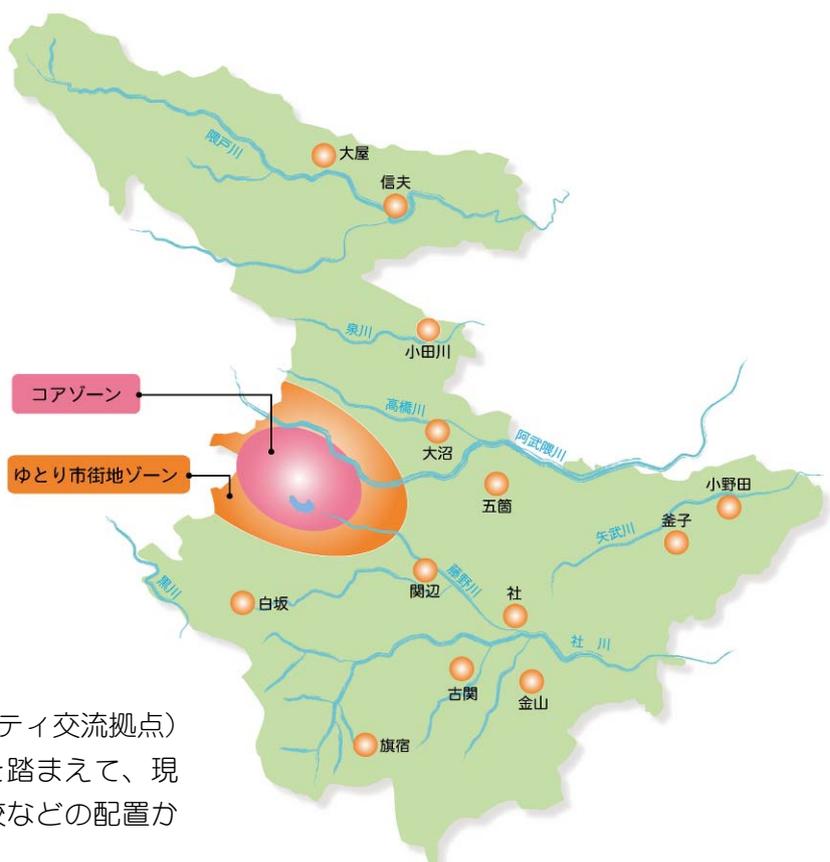
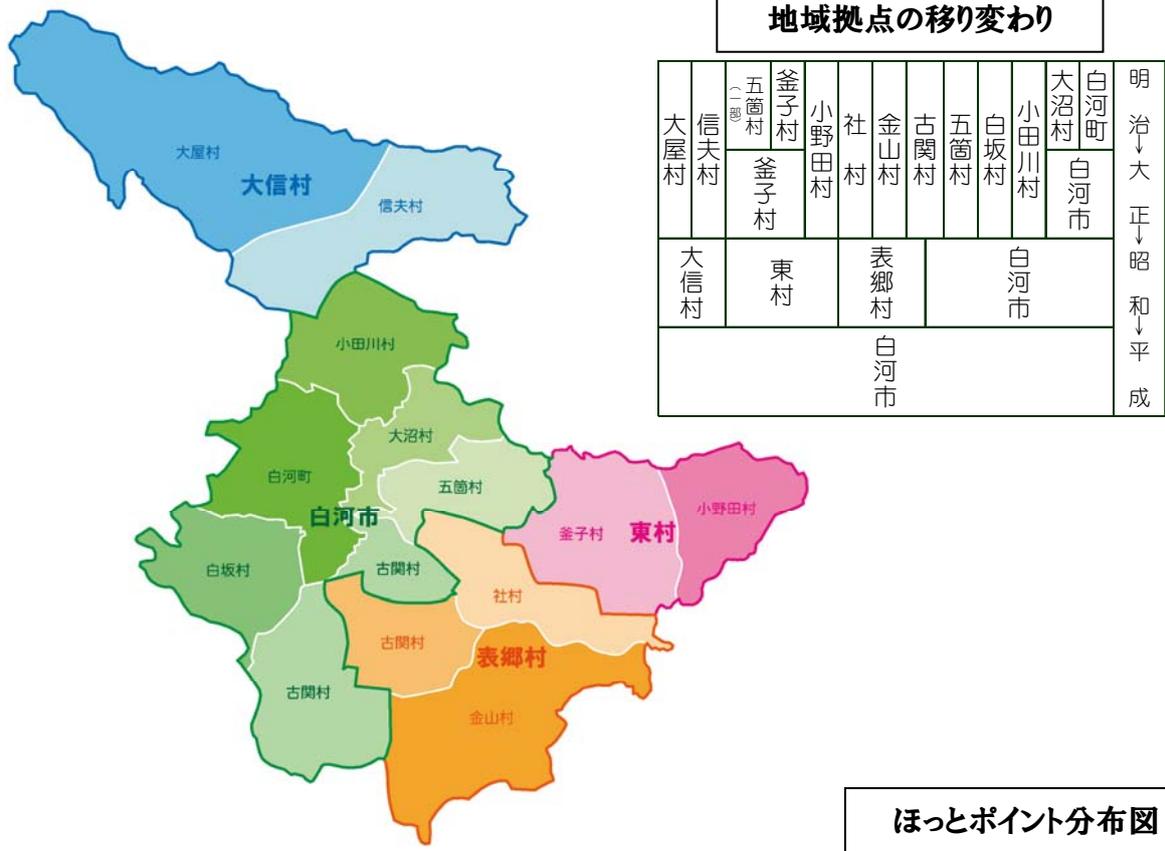
昭和50年前後



現在



## (9) 白河市域における地域拠点の移り変わり



ほっとポイント（コミュニティ交流拠点）は、明治以降の合併状況を踏まえて、現在の旧役場・郵便局・学校などの配置から設定しました。

## 2. わたしたちのふるさと白河

### (1) 歴史の深みを感じる景観

本市には、長い歴史の中でつくられてきた資源や景観があり、それらを代々守り続けてきました。



■小峰城跡（白河地区）  
平成3年に三重櫓、同6年に前御門が、史実に基づき忠実に木造復元されている。



■白河関跡（白河地区）  
古代大和朝廷が設置した検問所で、歌枕として知られている。



■関山（白河・表郷地区）  
標高619メートルで、本市のランドマーク的存在。かつては源義経や松尾芭蕉、白河藩主松平定信も関山に登り、山頂の成就山満願寺を参詣したといわれる。

■建鉾山祭祀遺跡（表郷地区）  
伝説によれば日本武尊が東征の際、この山頂に鉾を建て神を奉斎したとされる。標高403mの建鉾山の頂上には巨岩があり、小祠を安置している。





## ■南湖公園（白河地区）

白河藩主松平定信により、「士民共楽」の理念の基に造営され、現在も市民の憩いの場となっている。周囲には南湖神社、翠楽苑、明治記念館などがある。

\*



## ■小南湖（白河地区）

白河藩主の菩提寺の一角に存在した池。中心市街地にごつ然と現れる歴史空間である。

■にわながしげびょう丹羽長重廟（白河地区）  
白河の都市計画の基礎を築いた丹羽長重が奉られている。



## ■なほのり松平直矩・もとちかぶんぼ松平基知墳墓（白河地区）

元禄5年山形より入封し、白河藩15万石の城主となった父直矩と、そのあとをうけて城主となった基知が葬られている。



■白河ハリストス正教会（白河地区）  
県指定重要文化財。1915年に建立された全国でも希なビザンチン様式によるギリシヤ正教の教会。



■鈴木家住居（表郷地区）  
金山犬神地区の鈴木家の屋敷を移築したもので、築後約250年と推測される。



■白河駅（白河地区）  
大正10年に建築された、ステンドグラスのある大正ロマン漂う駅舎。



■白河市歴史民俗資料館（白河地区）  
白河地方の歴史と文化を分かりやすく紹介する施設。

## (2) 豊かな自然と四季の移ろいを感じる風景

本市は豊かな自然と調和した都市で、四季折々の美しい景観が人々の心を癒してきました。



### ■カタクリ（白河関の森公園）

奥州三古関の一つとして知られている白河関跡には、春の妖精ともいわれるカタクリが群生しており、早春の見どころとなっている。

### ■小峰城跡の桜



\*



### ■<sup>みょうなんじ</sup>妙閑寺の乙姫桜（白河地区）

伊達政宗が桜の苗木を将軍家に献上する途中、そのうちの1本を植えたものと伝えられている。樹齢400年以上。三春の滝桜と併せて、桜巡りコースとなっている。



### ■石原のしだれ桜（東地区）

東地域内には、数多くの老桜があるが、樹齢約300年以上のこの木が最も古い。



### ■ビャッコイ（表郷地区）

カヤツリグサ科の新種として明治38年に発表され、国内では唯一、表郷の金山に自生している。命名される際、採取地が会津と勘違いされ、白虎隊にちなんだ名前となった。



■南湖公園のコウホネ  
(白河地区)  
初夏の頃、南湖西岸に見られる。

■翠楽苑の灯籠茶会  
(白河地区)  
毎年8月に行われ、500基の  
灯籠が浮かべられる。



\*



■紅葉 (鹿嶋神社、谷津田川、翠楽苑)  
本市には紅葉の名所も多く、秋には各所  
で美しい景色が見られる。



\*

■那須連峰

那須連峰は、市民の心象風景として親しまれている。  
特に、南湖公園の借景としての眺望景観が美しい。



\*



\*

## (3)コミュニティ・文化

本市には、古くから続く地域を代表する「市」や「祭り」があり、良質なコミュニティ・文化が育まれてきました。



### ■白河だるま市（白河地区）

古くに定期的に行われていた市に、縁起物のだるまを売るようになったことから始まった。



\*



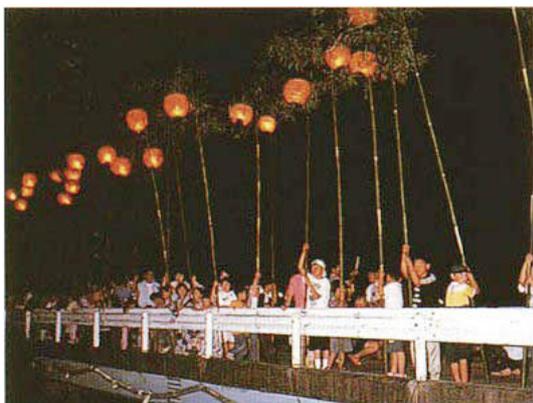
\*

### ■白河提灯まつり（白河地区）

総鎮守として古くから信仰を集めてきた鹿嶋神社。年に4回奉納される神楽は、市指定重要無形民俗文化財に指定されている。秋に行なわれる白河提灯まつりは400年の歴史ある祭り。



\*



■十日市の提灯祭り（大信地区）  
 青年たちの奏でる笛や太鼓の音に合わせ、約7mの竹に提灯をぶらさげた子どもたちが練り歩く。五穀豊穡などを願って約百年前から続いている祭り。



■中ノ沢権現梵天祭（表郷地区）  
 奉幣は一年置きに行われており、旧暦8月7日、「六根清浄」「お山は繁生」「ナンマイダンボ」と先達の声に唱和しながら進み、梵天を奉納する。



■釜子納涼盆踊り（東地区）  
 明治時代から変わることなく受け継がれている伝統行事。

■白河盆踊り（白河地区）



\*



\*

## (4) 都市を支える様々な交流

「人と人との交流」、「世代間の交流」、「コミュニティの交流」、「都市と田園の交流」、「ハンディキャップを越えた交流」、「モノの交流」、「都市の交流」・・・etc、様々な交流によって都市は息づいています。



### ■チャレンジショップ

中心地の空き店舗を利用し、高校生が旧3村の野菜の直売や、商店街による季節の催しを開催している。



### ■白河中心市街地まちづくり懇談会 (県南建設事務所)

持続可能な歩いて暮らせるコンパクトなまちづくりのために、「まち歩き」を行いながら、中心市街地の活性化を検討している。



### ■南湖清掃ボランティア

南湖の環境をきれいにしようと、毎年たくさんの団体や企業、学校などが参加して行われている。



### ■谷津田川から<sup>はじ</sup>創めよう！！ (金屋町活性化委員会)

平成10年に水害に遭った谷津田川河畔で、地元住民が主体となって、地域と周辺住民の交流を図ろうとイベントを行っている。



■大昭和祭り（白河青年会議所）

昭和の日にちなみ、白河青年会議所が発足した昭和 30 年の街並みを中心市街地に再現した。



■「城下町白河おひな様めぐり」

（本町復起会）

中心市街地を活気づけようと、地元商店街が行なっている取り組みで、本町、大工町、中町の商店店頭に 100 を越えるひな人形を一斉に飾り付ける。



■谷津田川せせらぎ通り（白河地区）

平成 10 年の水害後に整備され、市民の生活と憩いの場となっている。



■南湖公園

観光客の往来や、イベントなどで多くの人々が集い、様々な交流がもたらされている。



\*



■芭蕉と曾良

\*

「卯の花を かざしに関の 晴着かな」  
— 曾良 —